

幼児期の食育に関する一考察

—箸の作法を中心に—

篠原久枝

A Study on Food and Nutrition Education in Early Childhood : Focusing on Chopstick Manners

Hisae SHINOHARA

要 旨

幼児期における食育のあり方を探る一方策として、幼児をもつ保護者と将来学校での食育を担う教育学部生を対象に、箸の持ち方や箸のマナーに関する意識や実態についての質問紙調査を行った。幼児の食具の使用開始時期は、スプーンは1～2歳、矯正箸は2～3歳、箸は3～4歳が多く見られた。日常使用する食具は、年少児の約5割、年中児の約7割、年長児の約9割が「箸」であり、家庭において主に母親が箸の指導を行っていた。箸の使用を開始した契機は家族や友達が使用しているのを見て箸に興味を持ったが最も多かった。箸を正しい持ち方で上手に使えている幼児は約6割、「伝統型」の箸の持ち方と回答した保護者は約9割、大学生は約8割であった。保護者は子に就学前に正しい持ち方ができることを望んでいた。箸使いのマナーの一つである「嫌い箸」については、保護者も大学生も家庭で指導を受けていた割合が高く、保護者は自身が指導を受けた嫌い箸を幼児に指導していた。大学生は、将来教員として嫌い箸や食事マナーを指導したいという意欲が高いことが窺えた。今後は箸使いについての動的な観察・解析や食生活との関連との解析の他、食文化の継承のためには、幼児のみならず、幼児の食育に携わる方に対しての嫌い箸も含めた食事マナーや箸食文化についての食育も必要であろう。

1. 緒 言

平成28(2016)年から令和2(2020)年を期間とする第3次食育推進基本計画¹⁾の重点課題の一つに「食文化の継承に向けた食育の推進」がある。また、平成29(2017)年に公示された新学習指導要領では、小学校「家庭」²⁾ならびに中学校「技術・家庭(家庭分野)」³⁾の内容はこれまでの4領域から「A 家族・家庭生活」、「B 衣食住の生活」、「C 消費生活・環境」の3領域編成となり、「B 衣食住の生活」では、「生活文化を継承するための基礎として、日

本の伝統的な生活について学ぶことを通して、生活文化を大切にしようとする態度を養うこと」としている。「(3) 日常食の調理と地域の食文化」³⁾では、初めて「和食」ということばが明記された。この背景には、平成 25 (2013) 年に、「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコの無形文化遺産に登録され、日本の伝統的な食文化の継承に向けた取組が推進されていることもある⁴⁾。さらに、平成 31 (2019) 年に出された「食に関する指導の手引き - 第二次改訂版 -」⁵⁾では学校における食育の6つの視点として「食事のマナーや食事を通じた人間関係の形成能力を身に付ける【社会性】」、「各地域の産物、食文化や食に関わる歴史等を理解し、尊重する心を持つ。【食文化】」があげられ、食育として「食文化の継承」が重視されている。

我が国の食文化の一つに箸食文化がある。箸の用途や材質などの種類の他、箸使いに関するマナーも継承されてきた。箸は、中国の殷で発祥し、我が国には弥生時代末期に伝来し、最初は神を祭る祭祀用として折箸が使われていた。聖徳太子は箸と匙をセットにした中国式の箸食作法を初めて取り入れ、7～8世紀頃には箸食文化の定着が見られたと言われている⁶⁾。平安時代は箸と匙の併用であったが、鎌倉時代になると日常食として厚粥・水粥や椀の普及⁷⁾、銘々膳の普及によりほぼ箸だけが使われるようになり⁶⁾、日本料理の食事作法も確立されていった。江戸時代には「貞丈雑記」(伊勢貞丈)や「三礼口訣」(貝原益軒)など各種作法書に嫌い箸が記載されるようになった⁸⁾。明治時代になると、東京府布達「小学女礼式」⁹⁾に「嫌い箸」が記載されるなど教育の場でも箸使いのマナーが指導されるようになった。

では、箸使いの指導はいつごろからが相応しいのであろうか。「食に関する指導の手引き - 第二次改訂版 -」⁵⁾では、小学校第1学年学級活動の指導例として「正しい箸の持ち方や使い方、箸のマナー」があげられているが、「楽しく食べる子どもに ～食からはじまる健やかガイド～」¹⁰⁾では、幼児期にはスプーン・箸等の食具の正しい使い方を身につけながら、学童期にかけて食事マナーを獲得していくことが記載されている。向井ら¹¹⁾は、伝統的な持ち方ができるようになる「条件の一つ」は、箸が持てるようになった年齢(2歳以降)の時に家族から伝統的な持ち方を教えられていることとしている。また、5歳頃になると骨格を連結する筋肉が発達し筋力も増し、かなり複雑な動きができるようになることから¹²⁾、赤崎ら^{13),14)}は、幼児期の指導の効果の高さを報告している。また女子学生を対象とした山内ら¹⁵⁾は、箸の指導を受けた時期は伝統的な持ち方をしている伝統群では幼児期が多く、そうでない非伝統群では学童期が多いことを報告しており、幼児期の箸の持ち方の指導が重要といえる。

そこで、本研究では幼児期における食文化の継承に向けた食育のあり方を探る一方策として、幼児をもつ保護者と将来学校での食育を担う教育学部生を対象に、箸の持ち方や箸のマナーに関する意識や実態について調査を行った。

2. 調査方法および調査概要

(1) 調査対象者と調査項目

2019年12月上旬にM大学教育学部附属幼稚園の保護者と、M大学教育学部生(1年生～4年生)を対象に幼児期の食育に関する自記式質問紙調査を行った。保護者対象の質問紙は園を通して配布・回収した。大学生は講義を通して配布・回収した。配布数は保護者119部、有効回答数101部(有効回収率84.9%)、大学生138部、有効回答数127部(有効回収率92.0%)であった。主な調査項目は、1) 箸の持ち方、2) 箸の持ち方についての指導内容、3) 嫌い箸、食事マナー

の指導意識等である。

(2) 倫理的配慮

本調査では、調査の趣旨と個人情報の保護等の倫理的配慮について書面で説明し、回答をもって同意と見なした。

(3) 統計処理

統計処理には IBM SPSS Statistics Ver.23.0 を用い、属性による比較をするときには χ^2 検定を行った (有意水準 5%)。

3. 結果

(1) 調査対象者概要

保護者調査の回答者は、母親 100 人 (99.0%)、父親 1 人 (1.0%)、年齢は 20 代 1 人 (1.0%)、30 代 44 人 (43.6%)、40 代 56 人 (55.4%)、勤務形態は常勤 24 人 (23.8%)、パート 9 人 (8.9%)、無職・他 68 人 (67.3%) であった。家族形態は核家族が 94 人 (94.1%)、拡大家族が 6 人 (5.9%) であった。幼児は、年少児 21 人 (20.8%)、年中児 41 人 (40.6%)、年長児 39 人 (38.6%) であった。

大学生は 1 年生 8 人 (6.3%)、2 年生 80 人 (63.0%)、3 年生 18 人 (14.2%)、4 年生 21 人 (16.5%) であった。

(2) 食具の使用状況

幼児の食具の使用開始時期については、「スプーン・フォーク」、「矯正箸」、「箸」の3つに分けて尋ねた。「矯正箸」とは正しい箸の持ち方、使い方を習得するための補助用具であり、その形状から、「箸にリング状のフックが付いてそこに指を入れるもの (リング型)」、「ジョイントで箸と箸をつなぐもの (ジョイント型)」、「箸自体に指を置く位置のくぼみが付けられているもの (くぼみ型)」などがある (図 2)¹⁶⁾。「スプーン・フォーク」は 1 歳～2 歳、「矯正箸」は 2 歳～3 歳、「箸」は 3 歳～4 歳からという回答が最も多かった (図 1-1)。これは食のスキルの獲得の発達段階と一致するものであった。現在主に使用している食具は、年少児では「スプーン・フォーク」が約 4 割、「矯正箸」が約 1.5 割、「箸」が約 5 割であった。年中児になると「スプーン・フォーク」が約 1.5 割、「矯正箸」が約 1 割、「箸」が約 7 割、年長児では「箸」が約 9 割となり、年齢が上がるにつれて、「箸」の使用割合が増加していた (図 1-2)。

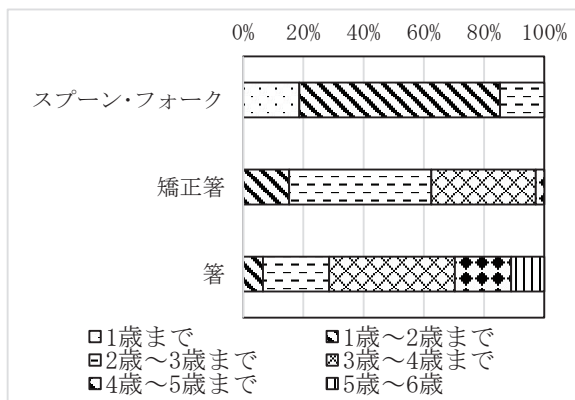


図 1-1 食具の使用開始時期

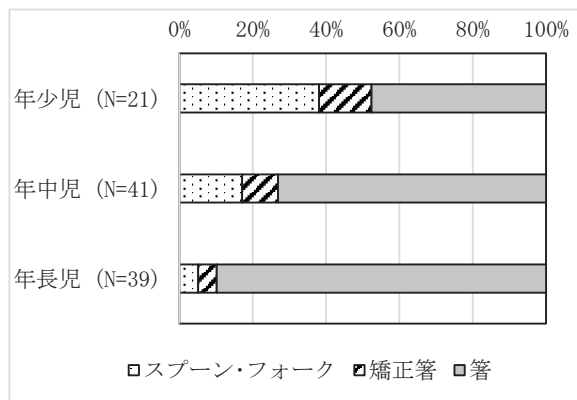


図 1-2 主に使用する食具

(2) 矯正箸の使用

幼児の食事の様子を観察においては、リング型やジョイント型の「矯正箸」の使用が多く見られたので、その効果について尋ねた。

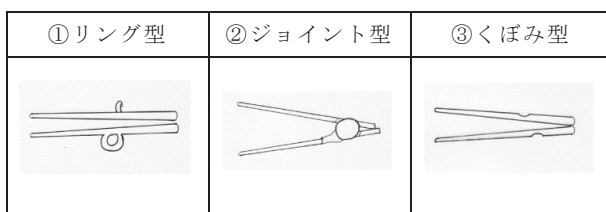


図2 代表的な矯正箸の種類

(文献16より許可借用)

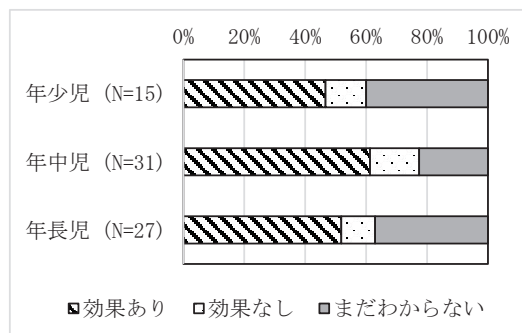


図3 矯正箸の効果について

幼児の約7～8割に矯正箸の使用経験がみられ、その効果については発達段階にかかわらず、「効果有り」としたのは5～6割程度であった(図3)。自由記述として、「箸への移行がスムーズになる」などの長所があげられた反面、「矯正箸を使いたがり、なかなか箸に移行できない」という短所も見られた。代表的な意見を表1に示す。中には「小学校入学まではエジソンリングタイプの箸を使用することになっている。少し上手になると普通の箸を使いたがるが、そこで渡してしまうと正しく持てるようにならず自己流の持ち方になる。2歳～6歳まで(外食時も持参)徹底的に矯正し、1年生の給食時に正しい持ち方が定着するように照準を合わせている」という矯正箸の積極的な利用についての意見もみられた。

表1 矯正箸の長所・短所

長 所	短 所
箸への移行がスムーズだった	矯正箸を使いたがりなかなか移行できない
自然と綺麗な持ち方になる	食事中に遊んでしまう
正しい指の位置が分かる	手のサイズに合わない
滑らないので持ちやすい	ばらばらに出来ないので洗にくい
キャラクターが描かれており喜ぶ	外食時など持ち運びしにくい

(3) 箸の持ち方の指導状況

箸の持ち方の指導は年少児では4割、年中児では6割、年長児では7割に行われていた(図4-1)。箸の使用を開始した契機は「①家族や友達が使用しているのを見て箸に興味を持った」が8割を超え、次いで「②スプーンやフォークを正しく持つことができるようになった」が約2割であった(図4-2)。

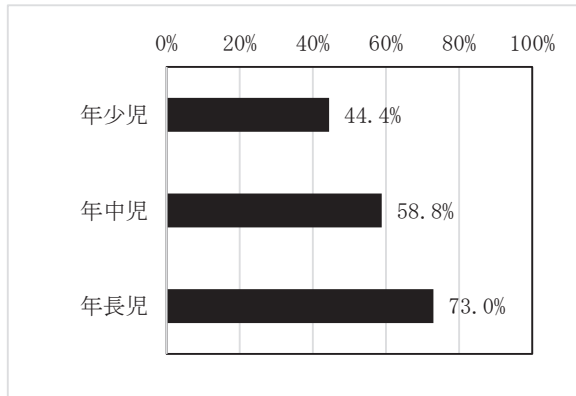


図 4-1 箸の持ち方の指導状況

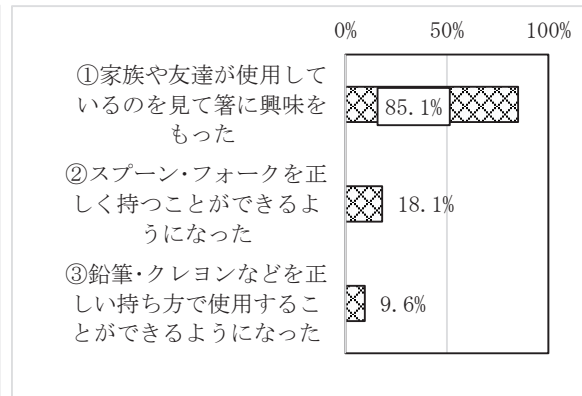


図 4-2 箸の使用開始の契機

(4) 箸の持ち方と指導内容

箸の持ち方には、親指、人差し指、中指、薬指の4本で持ち正しく使える「①伝統型」、鉛筆を持つように、親指、人差し指、中指の3本で持つ「②鉛筆型」の他、「③その他」として5本の指で握り込む持ち方や、4本指を使うが上の箸が動かさない持ち方などがある¹⁷⁾。本調査では、幼児に対しては「*正しい持ち方で上手に使用している」と回答した者を「①伝統型」とした。保護者と大学生に対しては、持ち方の図(図5)を提示して選択してもらった。

表 2 伝統型の割合



図 5 箸の持ち方^{注1)}

対象者		①伝統型 (%)
*幼児	年少児	42.9
	年中児	58.5
	年長児	69.2
保護者		92.1
大学生		85.8

自己申告による回答者の持ち方を表2に示す。幼児は年齢が上がるにつれて正しい持ち方の割合が徐々に増加していた。箸を未だ正しく持てないと回答した方に、いつまでには正しく持てるようになって欲しいか尋ねた結果、6歳まで、つまり就学前を目安とする人が8割を超えていた。保護者と大学生は、伝統型の持ち方は9割という高い値であった。

幼児に対しては、誰がどのように箸の持ち方の指導をしているのか、保護者と大学生に対しては、誰からどのような指導を受けたのかを尋ねた。幼児の指導は主に母親が担っていた。保護者は、回答のあった47人のうち家族から31人、保育所や学校から13人、自分で習得したが3人であった。大学生は回答のあった104人のうち家族から95人、保育所や学校から6人、自分で習得したが3人であった。主な指導方法や習得方法については表3にまとめた。幼児に対しては、一緒に持つ、手本を見せるなどの指導法であった。自由記述として「母が4歳頃から箸を使う機会を食事以外でも作り箸を使う機会を増やして、子どもチャレンジのDVDや本などを利用したり、遊びの時間にスポンジを箸で挟んだり、一緒に食事をする祖父

注1) アンケートでは5つの型を示したが、本稿では回答の多かった3つの型を示す。図は文献17より引用。

母を見せたりしながら覚えていってもらった。今は正しく持てるが、握力が無いので挟むときにクロスしてしまうのが気になっている」というまだ筋力が不十分なために正しく使えないという回答も見られた。保護者や大学生においては、「祖母や両親から食事の都度に厳しく指導を受けた」というしつけに関するものと、「鉛筆・習字」など「手の筋肉を上手に使う」ことができるようになって習得できたものが見られた。

表3 箸の指導・習得方法

対象者	指導・習得方法の例	
幼児	母が矯正箸で指導した	保育園からの指導を受けた
	鉛筆の持ち方を練習してから指導した	兄弟のマネをした
	家族が手本を見せ、一緒に持って指導した	声かけすると正しい持ち方になった。
保護者	両親や祖母から厳しい指導を受けた	母から矯正箸を使用するよう言われた
	親の代わりに友人が教えてくれた	担任や保健室の先生から指導を受けた
	テレビを見て自分で正しい持ち方にした	習字で正しい鉛筆の持ち方が出来たから
大学生	幼稚園の頃から矯正箸で指導を受けた	家族と持ちながら覚えた
	細かい物を持つ練習をした	食事のたびに厳しく指導を受けた
	右利きの矯正もしたので時間がかかった	保健室の先生がお箸検定を作っていた
	外出時に恥ずかしいからと指導された	鉛筆の持ち方に一本足した形と教わった
	嫌で自分で直した	習字教室に通い始めて直った

正しい箸使いができるようになるためには、身体の大きさにあった箸の長さや重さ、持ちやすい材質など箸の選び方も重要な要素となる。そこで、箸を購入する時に重視することを尋ねたところ、「持ちやすさ・使いやすさ」が8割と最も高く、次いで「長さ」が約7割であった（図6-1、複数回答）。手に合う箸の長さの目安としては、足のサイズや身長15%の他、「一咫半（ひとあたはん）」¹⁸⁾がある。親指と人差し指を直角に広げた時の指先を結んだ長さを「一咫」と言い、手に合う箸の長さは、「一咫」の1.5倍、つまり「一咫半」と言われている。しかしながら、この「一咫半」の認知度は2割以下と低かった（図6-2）。

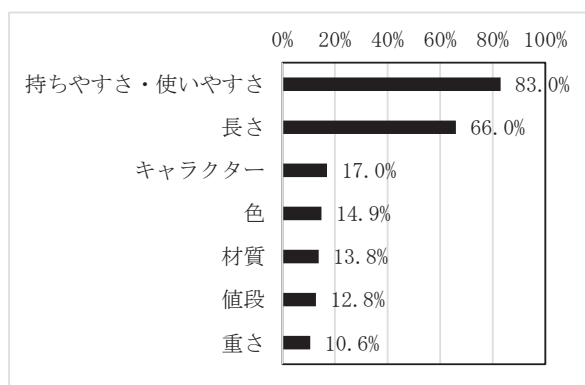


図6-1 箸の購入時に重視すること

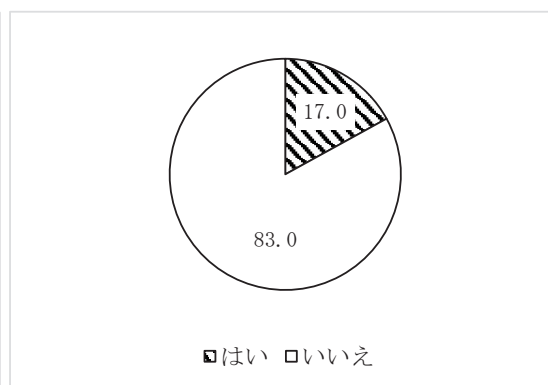


図6-2 「一咫半」の認知度

(5) 嫌い箸の指導

嫌い箸（忌み箸）とは、他の人に不快や不浄感を与えるような箸使いのことである。廣瀬¹⁹⁾は、嫌い箸は、箸のみを使用する日本独自の食事法から生まれた日本固有の食マナーとしている。明治15（1882）年に出版された東京府達「小学女礼式」⁹⁾の中では、食事をする時に忌むべきこととして「箸なまり・移り箸・もぎぐひ・ねぶり箸・こみ箸・こぢ箸・さぐり箸・そら箸・うけ吸・膳ごし」をあげている（図7）。

本調査では表4に示す「嫌い箸」10例について、保護者の受けた指導と子どもに対する指導観、大学生については受けた指導と認知度、これからの指導観について尋ねた。

保護者が「指導を受けた嫌い箸」では、①寄せ箸、④刺し箸、⑧立て箸、⑨拾い箸が約4割を超えていたが、⑤もぎ箸と⑦渡し箸は3割以下であった（図8-1）。「現在子どもに指導している嫌い箸」は、宗教的な意味合いの強い⑧立て箸が最も高く、次いで①寄せ箸、②ねぶり箸、④刺し箸であった（図8-2）。指導を受けた割合の低かった⑤もぎ箸と⑦渡し箸は、指導している割合も低い。しかしながら、「これから指導したい嫌い箸」としては⑤もぎ箸と⑦渡し箸が高く、保護者の認知度を高めることが、嫌い箸の伝承に繋がると言える（図8-3）。

大学生が「指導を受けた嫌い箸」では、①寄せ箸、④刺し箸、⑦渡し箸、⑧立て箸が約5割を超えていたが、⑤もぎ箸、⑥振り上げ箸、⑨拾い箸は2割以下であった（図9-1）。大学生には現在の「認知度」を尋ねたところ、いずれも「受けた指導」よりも高く、①寄せ箸、④刺し箸、⑦渡し箸は約8割もあり、家庭だけではなく学校教育における指導も影響していると思われる（図9-2）。「教師として指導したい嫌い箸」はいずれも5割を超え、食事マナーとしての嫌い箸の指導意欲の高さが窺えた（図9-3）。

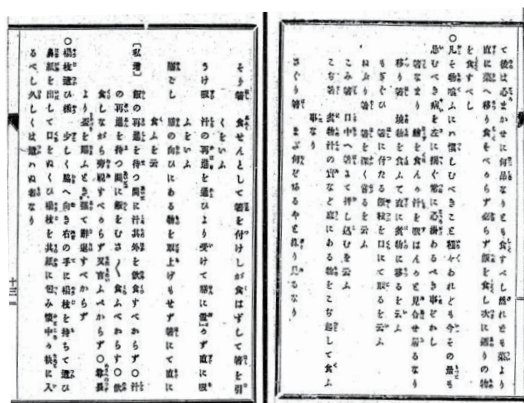


図7 「小学女礼式」⁹⁾

(資料提供：国会図書館)

表4 「嫌い箸」の例

嫌い箸	説明
①寄せ箸	食器を箸で手前に引き寄せる
②舐り箸	箸の先を舐める、くわえる
③移り箸	別の料理に箸を移す
④刺し箸	料理に箸を突き刺して食べる
⑤もぎ箸	箸についた汚れを口でもぎ取る
⑥振り上げ箸	箸を手の甲より高く上げる
⑦渡し箸	食事途中で箸を食器の上に置く
⑧立て箸	ご飯に箸を立てる。
⑨拾い箸	料理を箸から箸へ渡す。
⑩握り箸	二本の箸を片手で握る

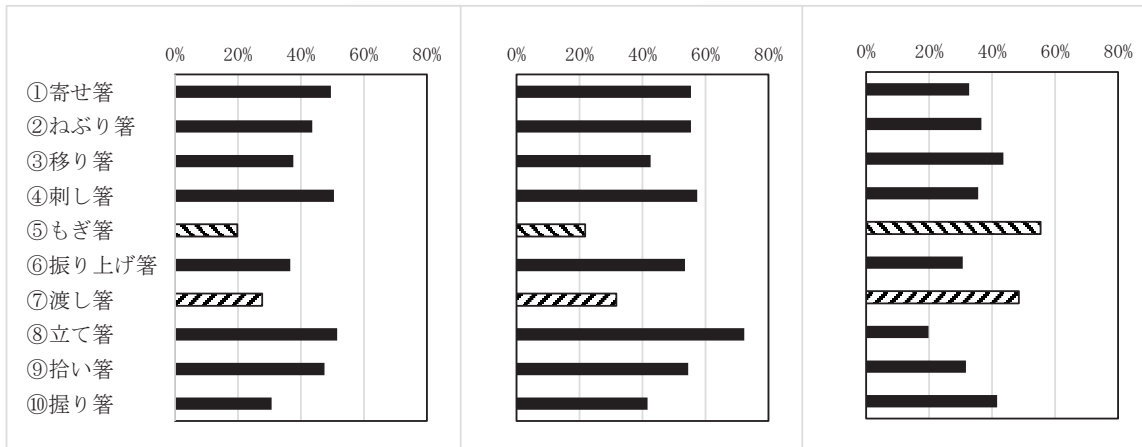


図 8-1 保護者が指導を受けた嫌い箸

図 8-2 現在子どもに指導している嫌い箸

図 8-3 これから指導したい嫌い箸

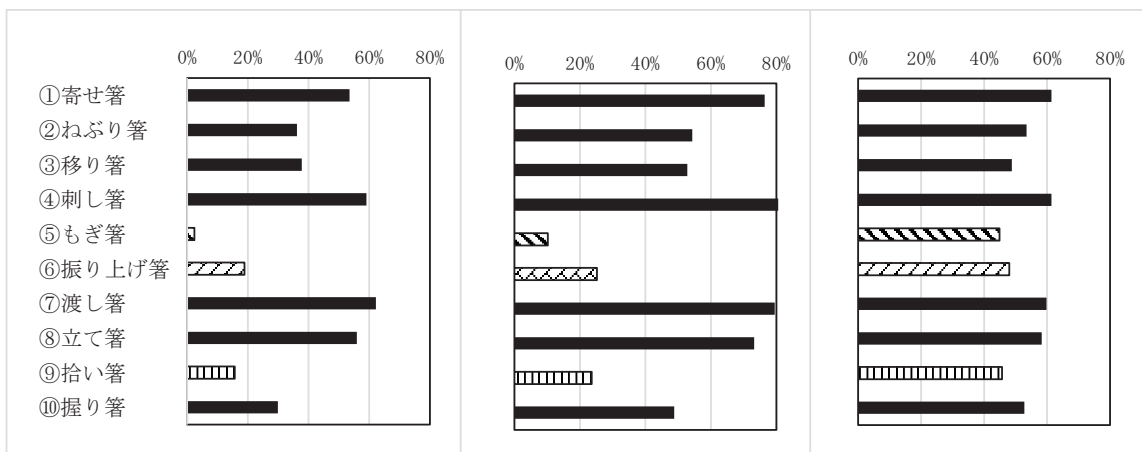


図 9-1 大学生が指導を受けた嫌い箸

図 9-2 大学生の認知度

図 9-3 教師として指導したい嫌い箸

(6) 食事マナーの指導について

「楽しく食べる子ども ～食からはじまる健やかガイド～」¹⁰⁾の中では、「楽しく食べる子ども」に成長していくためには、「食事のリズムが持てる子ども」、「食事を味わって食べる子ども」、「一緒に食べたい人がいる子ども」、「食事づくりや準備に関わる子ども」、「食生活や健康に主体的にかかわる子ども」の5つの姿を目標としている。幼児期の目安としては「幼児期—食べる意欲を大切に、食の体験を広げよう—」として「○おなかがすくりズムがもてる」、「○食べたいもの、好きなものが増える」、「○家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わう」、「○栽培、収穫、調理を通して、食べ物に触れはじめる」、「○食べ物や身体のことを話題にする」があげられている。これらを踏まえて、保護者が「食事をする時に大切にしたいこと」について9項目の中から3項目選択していただいた結果が図10である。

設問が「食育」ではなく「食事」とした結果であろうか、「1) 家族でコミュニケーションを図る」や「2) 楽しく食べる」は5割を超えたが、「3) 規則正しい時間で食事のリズムを作る」、「6) 調理や配膳、買い物など食事作りに参加する」、「7) 自然や作った人に感謝の気持ちをもつ」

などは3割以下であった。「5) 正しい食事マナーを身に付ける」も約4割であった。

子どもの食事のマナー指導は、誰が行うべきか、「父親、母親、祖父母、幼稚園や学校の先生、その他」から選択して回答を得たところ、保護者の62.4%、大学生の58.4%が「母親」と回答していた。しかしながら、その他として「両親と先生」、「誰もが」のような回答が見られ、「子どもにかかわるすべての人」が指導する必要がある（データ未掲載）。

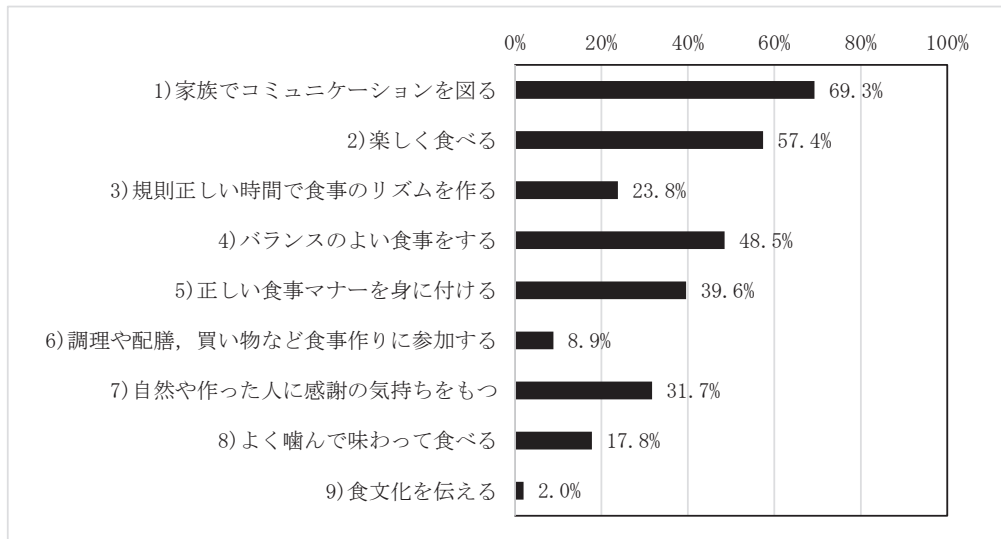


図 10 食事をする時に大切にしたいこと

次に、「5) 正しい食事マナーを身に付ける」と関連して、保護者に対して幼児の食事の様子 13 項目について尋ねた (図 11)。その結果、年少児では「①食べるのに時間がかかる」、「②好き嫌いがある」、「⑤むら食いをする」、「⑦食べ残しがある」、「⑨口に物が入ったまま話す」、「⑩食器を持たずに食べる」などが多く見られたが、年齢が上がるにつれて減少していった。

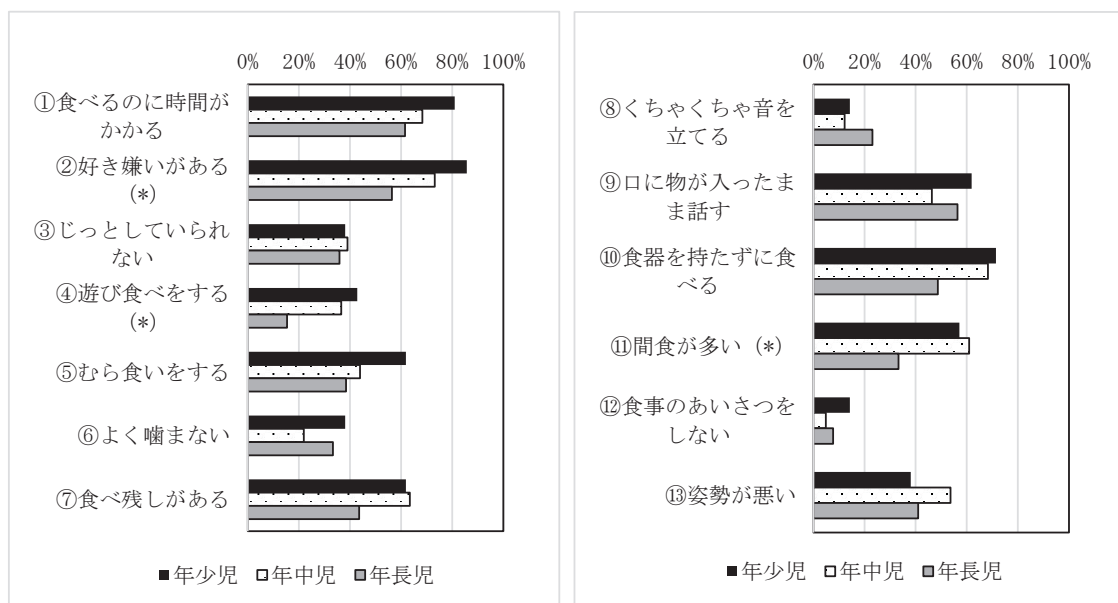


図 11 食事の様子 (χ² 検定: *p < 0.05)

「⑥よく噛む」, 「⑫食事のあいさつ」などは幼稚園においても指導がなされているものと思われる。

これら 13 項目について, 箸の持ち方による検討を行うために, 伝統型群と非伝統型の 2 群に分けて比較した (図 12)。伝統型群では「①食べるのに時間がかかる」, 「⑧くちやくちゃ音を立てる」, 「⑩食器を持たずに食べる」, 「⑫食事のあいさつをしない」などが有意に低く, 望ましい食事マナーが身につけているものと推察された。

これらの 13 項目中 12 項目について, 保護者には「幼稚園や小学校で指導して欲しい食事マナー」を, 学生には「将来教師として指導したい食事マナー」を尋ねた (図 13)。その結果, 保護者は, どのマナーも学校や幼稚園で指導して欲しい人の割合は 1 割~2 割ととても低く, 食事マナーについては, 家庭でしつけるものとの意識が窺えた。一方, 大学生はどのマナーについても指導したい人の割合が約 5 割~6 割と比較的高く, 学校現場での食事のマナー指導への意識が高いことが窺えた。

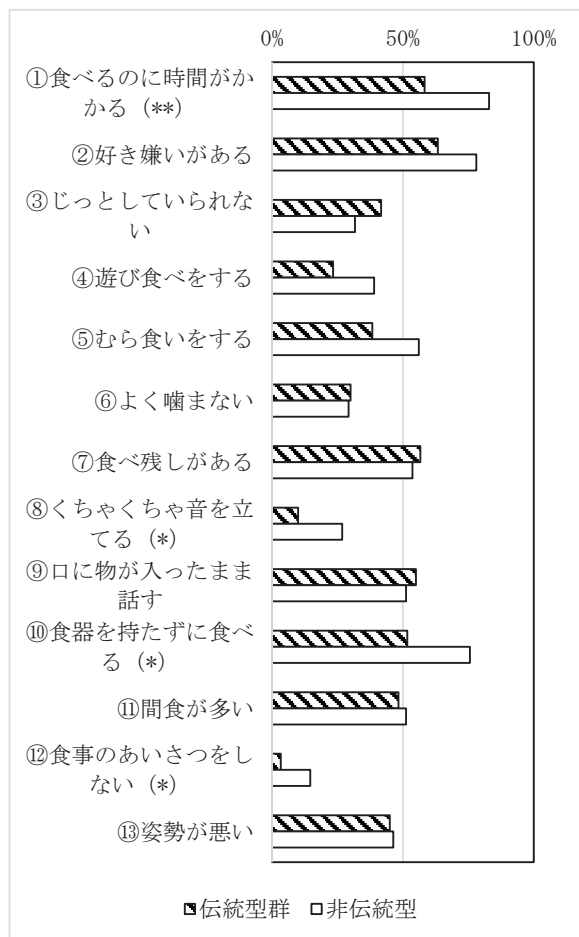


図 12 箸の持ち方と食事中の様子
(χ^2 検定: * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$)

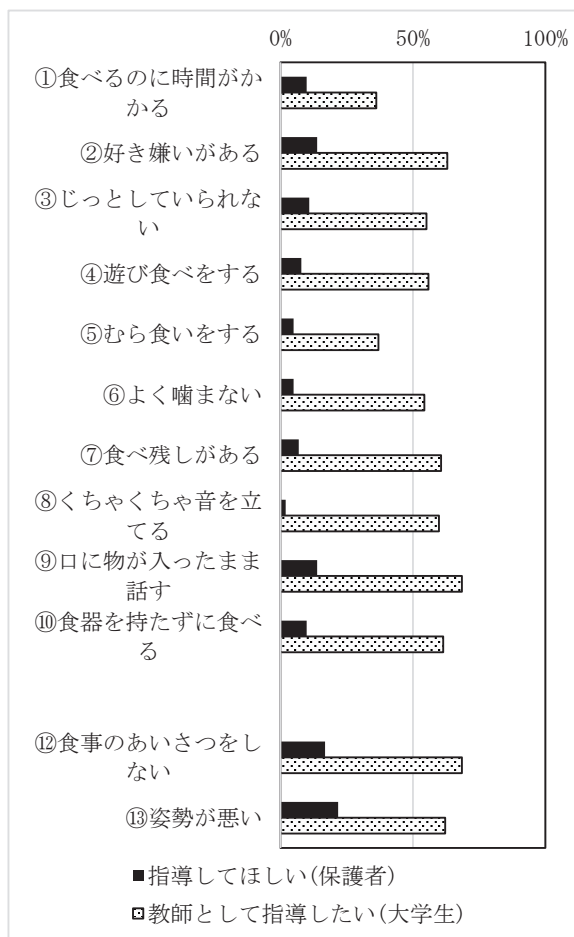


図 13 食事マナーの指導意識について

4. 考 察

本稿では、食育として食文化の継承が謳われている今日、幼児期における食育のあり方を探る一方策として、幼児をもつ保護者と将来学校での食育を担う教育学部生を対象に、箸の持ち方や箸のマナーに関する意識や実態について調査、分析を行った。調査対象は、M大学教育学部附属幼稚園保護者とM大学教育学部生のみであり、限定的な研究であるが先行研究と併せて考察をする。

幼児期は離乳期の「手づかみ食べ」から、「スプーン・箸等の使用」へ移行する時期であり、食べ方や食具の使い方を習得する時期である。分析の結果、主に使用する食具は年少児では箸は約5割であるが、年長児では9割となっていた。各年齢において矯正箸の利用も見られたが、効果があったとしたのは半数であった(図3)。このことは、井間ら¹⁶⁾が、矯正箸の型によってはつまむ、はさむなどの機能がしにくいものがあると報告していることと関連するものであろう。箸を使い始めた契機や指導法は、家族や園でのしつけとしての指導の他、箸使いに興味を持った子ども同士の学び合いや、手指の筋肉の発達によるものであった(図1-2, 図4-2, 表3)。箸の正しい持ち方とされる「伝統型」の持ち方は、年少児から年長児になるにつれて高くなり、年長児では約7割であった。保護者ならびに大学生の「伝統型」の持ち方も約9割と高い値であった(表2)。小学生とその保護者を対象とした勝田²⁰⁾は、保護者が小学生の子どもが正しく箸を持てると回答したのは64%、正しい箸使いができると回答したのは58.4%、保護者が正しい箸使いができると回答したのは86.8%と報告している。大学生については、向井ら²¹⁾は69.2%、坂田²²⁾は46%、加藤ら²³⁾は71%、写真撮影をして調査した山内ら¹⁵⁾は60.9%と報告している。本調査では、年長児、保護者、大学生ともに先行研究の値よりも比較的高い値であった。幼稚園の保護者を対象とした赤崎ら²⁴⁾の報告では、約半数の保護者が箸の持ち方の指導をしておらず、ビデオ解析の結果、箸を正しく持っている幼児はほとんどいなかったとしているが、本調査では、年中児には6割、年長児では7割が箸の持ち方の指導をしており、向井ら¹¹⁾の報告と同様に家庭における指導の熱心さに拠るものと推察される(図3-1, 表3)。

しかしながら、今回の調査は保護者が回答したものであり、実際の箸の動かし方や食べ物の掴み方など箸使いの実態についての解析はしていない。著者らもお弁当の日の参与観察を行ったが、床に正座をして美しい箸使いをしている幼児が観察された一方で、右手に箸を握ったままおにぎりやスティックに刺されたおかずを左手で摘んで食べている幼児もみられたことから、今後は食べるときの姿勢や食器の持ち方も含めた箸使いの解析が必要であろう。赤崎ら¹³⁾は、年長児を対象とした箸の持ち方の指導により半数以上が「伝統型」になったことを報告しており、この時期の指導の有効性を裏付けるものと思われる。向井ら¹²⁾は、「箸の機能は、摘む、挟む、支えるという『基本動作』と、切る、裂く、ほぐす、剥がす、すくう、包む、載せる、押さえる、分けるという『特殊機能』に分けられる」と分類している。小学1年生を対象に9種類の箸の使い方を指導をした井間ら¹⁶⁾は、継続的な指導の重要性を報告しており、今後は発達段階を踏まえた箸使いの機能性の視点からの継続的な調査・解析も必要であろう。

田島ら²⁵⁾は大学生を対象に16種類の嫌い箸について、「教えられた経験」は①寄せ箸、②ねぶり箸、③移り箸、⑨拾い箸などは8割を超えており、これら嫌い箸の「伝承意識」も高いことを報告している。これら「教えられた経験」は、本調査の大学生が「家庭で受けた指導」の割合よりも高い値であった。この背景には調査年度が2005年と2019年と14年間の開きが

あり、家庭における嫌い箸の指導のあり方が変化してきている可能性もある。本調査においても、保護者の指導を受けた経験が、現在の子どもの指導に影響していた（図 5-1, 図 5-2）。「知らないマナーがあり、勉強になった」という感想が述べられていたが、今後指導したい嫌い箸は、保護者も大学生も指導を受けた経験の低かった嫌い箸が高い値となっており（図 5-3, 図 6-3）、このアンケートへの回答により認知を高めた結果と言えよう。廣瀬¹⁹⁾は 30 の嫌い箸について、「箸を持つ」、「箸をつける」、「口に入れる」、「箸を置く」などの動作系列の視点から分析を行ったが、嫌い箸に含まれない食事マナーがあることや、文化や宗教に関連する嫌い箸もあることを指摘している。本調査においても食事の様子として、食事マナーに関する質問をしたが、「くちやくちやく音を立てる」、「食器を持たずに食べる」、「食事のあいさつをしない」の出現率は伝統型の持ち方をしている群の方が少なかったことから、箸の持ち方と併せてこれらのマナーも指導されていることが窺えた（図 12）。

小学生を対象に箸の持ち方と食生活の関連を調査した河村ら²⁶⁾は、正しい持ち方をしている群の方が、食事のバランスが良いことや食べることに対する興味・関心が高いことから、食教育として箸の持ち方を含めた食全体の営みをとらえ直すことが必要としている。本調査においては、幼児の箸の持ち方とその指導、嫌い箸の指導を中心としたため、食生活についての検討はしていない。今後、箸の使い方の動的な解析を行う際には、食材や調理法、献立、さらには盛り付けや配膳も含めた食意識や食生活全体の検討が必要であろう。

今回の調査では、箸の長さの目安となる「一咫半」の認知度は 2 割以下と低かったが、保護者の方から「今までをふり返るよい機会だった」、「知らないマナーがあり勉強になった」という感想や、「食事マナーは家庭で指導するべきだ」、「学校現場でも指導することで子どもも緊張感をもって食事が出来るのではないか」という貴重な意見もいただいた。また、「嫌いな食べ物を無理矢理食べさせるのはどうなのか」、「三角食べはしなくても良いと聞くが、本当に正しい食べ方とはなにか」、「矯正箸はどう使うべきなのか」などという疑問も寄せられ、保護者の方々の子どもの食育への意識の高さが窺えた。今後の幼児期における食育としての食文化の継承のためには、保護者や教員養成系学生を始め、幼児の食育に携わる方に対しての嫌い箸も含めた食事マナーや箸食文化についての食育も必要であろう。

追記

本研究は平成 30 年度（2018 年度）～令和 3 年度（2021 年度）科学研究費補助金（基盤研究（C）, 課題番号：18K02632, 「教員養成系学生を対象としたプロジェクト学習を活用した食育実践力向上プログラム構築」（研究代表者：篠原久枝）の研究成果の一部である。調査に協力していただきました保護者の方々ならびに調査・集計に尽力を注いでくれた卒論生の佐田萌美氏に感謝申し上げます。

5. 引用文献

- 1) 農林水産省：食育基本法・食育推進基本計画等．<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kannrenhou.html>（2020 年 5 月 1 日閲覧）．
- 2) 文部科学省：【家庭編】小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説．https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387014.htm（2020 年 5 月 1 日閲覧）．

- 3) 文部科学省：【技術・家庭編】中学校学習指導要領（平成29年告示）解説．https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm（2020年5月1日閲覧）．
- 4) 農林水産省：「和食」のユネスコ無形文化遺産に登録されました！．https://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h25/h25_h/trend/part1/chap0/c0_1_00.html（2020年5月1日 閲覧）．
- 5) 文部科学省：食に関する指導の手引－第二次改訂版－．https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm（2020年5月1日閲覧）．(2019).
- 6) 勝田春子：食文化における箸についての一考察 ―わが国における箸の変遷（第1報）―（弥生時代～鎌倉時代）．文化女子大学研究紀要(20): 205-215. (1989).
- 7) 宮崎清, 青木弘行, 田中みなみ：日本における椀の発生と室町時代までの造形的展開：伝統的工芸品・椀に関する研究(2). デザイン学研究(72): 67-74. (1989).
- 8) 徳川義親, ほんとうの礼儀作法 徳川家当主に学ぶ. 2016: 祥伝社（東京）．
- 9) 西村敬守編, 小学女礼式. 1982: 暢盛社（東京）．
- 10) 厚生労働省：楽しく食べる子どもに ～食からはじまる健やかガイド～「食を通じた子どもの健全育成（-いわゆる「食育」の視点から-）のあり方に関する検討会」報告書．日本児童福祉協会．(2004).
- 11) 向井由紀子, 橋本慶子：箸の使い勝手について-箸の持ち方(その3). 家政学雑誌 34(5): 269-275. (1983).
- 12) 向井由紀子, 橋本慶子, 箸. 143-185. 2001: 法政大学出版局（東京）．
- 13) 赤崎眞弓, 元田美智子, 松野絵理, 仁部直美, 虎谷香, 小濱有里子, 石橋潤子：幼児期から学童期における子どもの食生活に関する研究―箸の持ち方指導を通して―. 教育実践総合センター紀要(10): 165-179. (2011).
- 14) 赤崎眞弓, 元田美智子, 松野絵理, 仁部直美, 虎谷香, 小濱有里子, 石橋潤子：幼児期から学童期における子どもの食生活に関する研究 ―箸の持ち方指導の定着に向けて―. 教育実践総合センター紀要(11): 63-72. (2012).
- 15) 山内知子, 小出あつみ, 山本淳子, 大羽和子：食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー．日本調理科学会誌 43(4): 260-264. (2010).
- 16) 井間眞理子, 中村恵子：学級における箸の持ち方の指導とその効果．日本食育学会誌 13(1): 33-42. (2019).
- 17) 日本スポーツ振興センター：平成22年度 児童生徒の食生活実態調査【食生活実態調査編】．https://www.jpnsport.go.jp/anzen/school_lunch/tabid/1490/Default.aspx（2020年5月1日閲覧）．
- 18) 大塚滋, 川端晶子編著, 調理文化学. 21世紀の調理学 1. 174-177. 1996: 建帛社（東京）．
- 19) 廣瀬直哉：食事動作から食事マナーを考える：「嫌い箸」を例として．京都ノートルダム女子大学研究紀要 = Bulletin of Kyoto Notre Dame University(49): 15-28. (2019).
- 20) 勝田春子：「日常食からみた箸の意識」についての調査（第2報）―東京都練馬区小竹小学校児童および保護者―. 文化女子大学紀要 服装学・生活造形学研究(31): 25-36. (2000).
- 21) 向井由紀子, 橋本慶子：箸の使い勝手について：箸の持ち方. 家政学雑誌 29(7): 467-473. (1978).
- 22) 坂田由紀子：箸の持ち方とその機能性およびその要因について ―女子学生について―. 日本家政学会誌 41(7): 637-645. (1990).
- 23) 加藤和子, 橋内範子, 大嶋悦津子：女子大生における箸に対する意識調査．東京家政大学博物館紀要 9: 33-41. (2004).
- 24) 赤崎眞弓, 小清水貴子, 元田美智子, 松野絵理, 中路知恵, 林明子, 小濱有里子：幼児期から学童期における子どもの食生活に関する実態把握 ― 箸の持ち方調査を通して ―. 教育実践総合セン

- ター紀要 (9): 129-138. (2010).
- 25) 田島真理子, 橋口尚宝, 大富あき子: 食事規範の伝承に関する研究. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編 57: 87-95. (2005).
- 26) 河村美穂, 高橋愛: 箸の持ち方と食生活との関連 ～小学校低学年における調査より～. 埼玉大学紀要 教育学部 57(2): 37-46. (2008).

(2020年5月8日受理)